

當代記

五

內閣文庫	
番號	和 33041
冊數	20 (5)
函號	150 52

庫文閣內		
五〇〇	三三〇四一	和
一	二〇	書
架	冊	號



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



香林記卷之九

遠列表御平道之事

今川之宗御代之事

信玄殿下之事

信長入關御代之事

德川之宗御代之事

氏真殿下之事

當代記卷之五

遠列表御年遣之事

今川之家風亂事

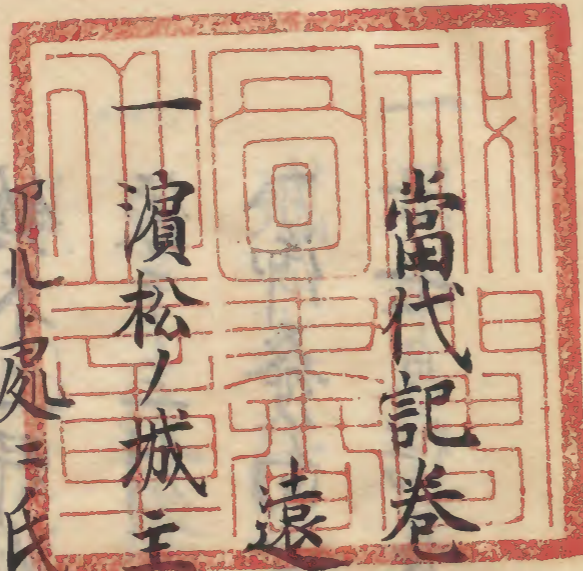
信玄駿府ヲ攻取事

信長ハ御加勢遣事

懸川之城御攻被成事

氏真駿府ハ飯又立退事

大真親政(一) 神戶(一) 立(一) 事
關川之(一) 神戶(一) 立(一) 事
討身(一) 神戶(一) 立(一) 事
討(一) 神戶(一) 立(一) 事
今川之(一) 神戶(一) 立(一) 事
討(一) 神戶(一) 立(一) 事



當代記卷之五

遠列表御年遣之事

一濱松ノ城主井伊豊前守家康公(内應

也) 氏真駿河(呼) 誅討ス其臣

江馬安藝同加賀猶以家康公ニ服シ本

領安堵ス加恩ヲ賜テ軍功ヲ励ス

一同十二月廿九日叙爵有テ三河守ニ任セ

テ凡

一 永祿十年鈴木日向守同監物家並ノ采
地ニ入テ居ス然レ共守リ堅ル事ヲ不得
シテ駿河ヘ奔ル去ル七年八年ノ頃ヨリ
家康公ノ武威強ク働キ給ヘハ寺部ノ
鈴木上野ノ酒井城ヲ捨テ出奔ス然ルニ
依テ三列ノ小侍共不殘帰服ノ上ハ遠列
一 御發向有ヘキト命セテ凡、同年五月
廿七日信長ノ娘岡崎ニ輿入

一 同年家康公遠列表ヘ御發向濱松ノ
城ハ井伊豊前守カ後室抱テアリ家康
公ヨリ後藤太郎左衛門本平_下右衛門ヲ以
城ヲ開テ渡スニ於ハ扶持ヲ加家人等ノ本
領安堵タレシト仰ケレ共後室何トカ思
ヒケシ承引ナキニ依テ十二月廿四日ノ夜押
詰攻テルヘキト相定ル処ニ其夜塩市口
ヨリ切テ出相戦フ味方大軍ナレハ翌

日二三ノ丸ヲ攻破ル寄手ニモ手負死人
三百余人城兵二百余戦死ス後室仕女
ヲ左右ニ引連切テ出一所ニ於テ討死ス
是ニ依テ濱松御宇ニ入

今川家風乱ル事付 信玄駿府ヲ攻取
一義元死去ノ後氏真イソトナク遊宴ヲ更
トシ風流ヲ好寵臣三浦右衛門元ヨリ武士
ノ本意ヲ不知氏真ノ近習ノ者ヲ引付

念頃ヲ加ヘ己カ行跡ヲ答ラレ國政ノ更
ヲ善キ様ニ云セケレハ氏真實ソト思ヒ
右衛門ニ増タル者アラジト力事ヲ任セ
給フ元来弁倭ノ者ニテ依怙多ク裁判
不明ナレハ今川ノ一門歷々瀬名関口新
野ヲ先トシテ末々ヲ心元ナク思ヒ三浦
ニ異見ヲ加ルトイヘ共奢侈積悪身ニ余
リ是ヲ不用叔父甲斐ノ信玄使ヲ以義

元生害ノ帛合戦アリハ信玄モ力ヲ合せ申
ス（キト外ニ事ヲヨセテ氣ヲ付給ヘハ却テ
信玄ヲ疑ヒ曾テ承引モナシ祖父信虎
駿府ニ有テ此様子ヲ見給ヒ兎角駿河ハ
佗人ノ國ニ可成ト察シ瀬名関口朝比奈
等ト談合シテ氏真ヲ押ノケ駿河ヲ可治
ト催サレ、処ニ庵原安房守氏真ニ告テ
信虎ヲ追拂ヒ関口刑部ヲ害ス依之信

虎京都（出奔ス信玄此様子ヲ見給ヒ家
臣ト評シ合せ跡部大炊ヲ使トシテ申遣
ハサレケルハ去ル一ノ宮ノ合戦ニ家康僅
三千余騎ヲ以氏真ノ一万余騎ニ切
勝吉田牛久保ノ城ヲ乘取ル其誓レ都
鄙隠レナシ此上ハ遠列ノ諸士皆以降參
シテ頻テ駿河へ押入駿府ノ城落居程
アル（カラス然ル上ハ家康ト信玄カ取合ニ

成へキ更眼前也相列ト越後兩旗ニ向フ
サへ油断ナキニ其上ニ三列家康ト戦フ
ニ於テハ甲兵曾テ寸隙有へカラス今川
家トハ未タ親族ノ筋目遠カラズ旁以
見放シ難キ更ナレハ駿府へ加勢ヲ指越
申へキト云々氏真以ノ外憤リ當地へ加勢
ヲ入レ終ニハ押領スへキ計策不及覺
悟ト使者ニ申渡サレケル信玄此旨ヲ聞

テ此上ハ力ニ不及ト思ヒ其後駿府ノ家
臣共ヲ懷ケ二万余騎ヲ卒シ永禄十一
年辰ノ十一月廿八日甲府ヲ立テ十二月六
日駿河へ取掛ル元ヨリ駿府勇武ノ侍大將
共ニ三浦ニ飽果氏真ヲ恨ミ廿頭迄信玄
ニ降リケレハ防戦叶ヒ難ク駿府へ引入ル
ニ旗本勇武ノ諸士共一人トシテ粉骨ヲ
尽スへキ風情ナラス彼右衛門カ寄子

別懇ノ輩ハ日比ノ輕薄口ノ才覺利口
トハ遠ヒ侍ノ義理ヲ不知振ヒワナ、キ
落支度ナレハ氏真竈城ノ一戦ニモ及
同十三日府中ヲ立去テ掛川ヘツホニレケル
道スカラテ三浦右衛門カ日比ノ謔言ノ積
悪氏真ニ報ヒ奉ルト諸人一同ニ呼ア
ケタレハ氏真モ此敗三浦ヲ悪人ト知テ
突放シ給トモ賊後ノ鎗ニテ益ナレ彼

右衛門ハ利口理發ハ人ニ勝レヌレ共元
来武士ノ器量ナケレハ信玄ヲ頼ム事モ
信長卿家康卿へ属スル事モ不成獨立
成難ク前後ニケレテ掛川ヲ落行ケルニ
スハヤ彼大悪人メカ落テ通ルト呼リケレ
ハ村々ヨリ百姓共出合討テ掛リケルソレ
迄相從フ輩ハ三浦同意ノ者ナレハ我先
ニト逃散ケル百姓共前後左右ヨリ取巻

棒千ギリキヲ指當己レ主君ノ寵愛ニ
誇リ目前ニ利分ノ御為ト号シ課役ヲ
掛テムサホリ理モナキ小事ニ法度ヲ立
山川廣野ニ運上掛賣買ノ座ヲ定テ上
前ヲ取或ハ商人ヲナツケ潜ニ五穀或ハ茶
綿ヲ買取テソロクト高直ニ拂ケル故諸
人イツトナク困窮シ妻子ヲ活却シ或乞
食トナリテ道路ニサニヨフ者多シ大法ニ

背ク者ヲモ内證ヨリ頼シテハ理ト号シテ
人ノ田畠ヲ取テ与ヘ理アレ共非義ト云テ
田畠ヲ取放シ水籠篋卷ニシテ責シ
其悪行来世迄モ不遠今ハ爰テ思ヒシテ
セント馬ヨリ引下シ赤裸ニナシテ高キ小
手ニク、リアケ木ノ下ニ結付タリ右衛
啼々申ケルハ全ク我等ハ不存奉行人
役者ノ所為也セメテ其小袖一ツ得サセ

給トナケキケレハ若キ者眼ニ角ヲ立
己ソレ程ノタハケニテ家老職ヲシテ
今如此ノ有様也其奉行人ハ皆己ガ目利
ニテ職ニ付タレハ皆己カ所爲也シヤツニ
物云ハセソナブリ殺シニセヨト匂リケル
老タル百姓共カハユカリテ繩ヲ解テ
突放シケレハ菅笠ヲ前ニ當古コモニテ
腰ヲ隠シ啼々夜モスガラ馬伏塚ニカ

カグリ著テ小笠原与八郎ヲ頼ミケレハ
却テ三浦ヲ搦捕庭前ニ引ス丑氏真愚
將ニモアラサレ共汝ガ弁舌ニ惑ヒ何ノ故
ナキニ咎ヲ蒙ル者アリ我モ其横難ヲ
拂ハン為ニ汝ニ親ミ禮ヲ厚ク頼ミケルゾ
汝カ父武藤新三郎ハ上方牢人成カ已ヲ
三浦右衛門尉ト名乗ラセ諸侍ノ上座ニ
置キ武士ノ事國政迄イロハセ給フ其厚

恩ヲ忘レ諸人ニ無礼ヲナシ^緞緞ヒ氏真ノ
善キ侍ト思ヒメサル、者ヲモ己カ^外外
ノ者ヲハ連々惡サニナシ云ナシ終ニ
氏真ノ前ヲ遠サケ^緞緞ヒ氏真ノ不善ヲ
侍ト思ヒメサル、者ヲモ己カムキ^寄寄ノ
者ヲハ連々取成人ニモ善ク云セテ終ニ
加増ヲ取テ与ヘ汝カ威光ヲ立テ氏真ヲ
人形ニシナシ諸人恨ミテ含ミ憤リヲ發

ス其思ヒ^ホ梵天帝^ニ通シ今氏真ニ報
テ國ヲ亡シ給ヘリ早々首ヲ刎テ冥途ニ
遣シ閻魔ノ裁判ニ任セヨト有ケレハ右衛
門^渡流シ命計ハ助ケ給ヘト歎キケル
太刀取傍ヘ立寄最期唯今ソト云ハ足
ズリシテ前後不覺ニ取乱シ太刀ノ當
所モ不定太刀取ノ者足ニテ踏倒シスリ
首ニシテ家康公ヘ獻シケル

一 信玄ハ駿河府中へ責入へキト思ヒ立テ
山縣三郎兵衛ヲ使トシ世崎へ申越シテ
ルハ遠江ノ義大井川ヲ境トシテ御手柄
次第切取給へ駿河ノ義ハ信玄自カヲ以
切取へキト云々家康公聞レ召レ國切ノ
御約束聊以異義存間敷トノ御返更也
一同十一年正月十七日信康卿左京大夫
ニ任ス

一 信玄駿河へ發向スルト聞給ヒ家康公モ
永録十一年四月遠列へ御發向ナサレ不
攻シテ大半御手ニ属シ奉ル掘川ノ大澤
左衛門尉二股ノ左衛門尉高園ノ淺原ス
夕寺ノ松下久野三郎左衛門各御味方ニ
属ス同十一日今泉四郎兵衛菅沼新八郎
ヲ案内者トシテ井ノ谷筋へ出サセラレ
同十二日菅沼次郎右衛門近藤登助鈴木

三郎大夫方へ御狀ヲ被遣ケレハ各御味
方ニ參御案内仕同十八日遠列安間村
ニ陣シ江馬安藝守同加賀守ヲ殺シ即
濱松ニ入給ヒ菅沼新八郎并ニ軍兵ヲ
被遣井ノ谷ノ城攻落シ菅沼近藤鈴木
郷道守ニテ本坂ニ至リ刑部ノ城ヲ責落
シ菅沼新八郎カ家人同名又九衛門又
置濱太公ニハ酒井九衛門尉ヲ篋置レケル

一家康公小笠原新九郎ニ命シテ曰汝カ一
族馬伏塚小笠原与八郎ヲ味方ニ引入
仰テ凡、ニ付テ彼地ニ趣見レハ早人質
ヲソレテ秋山ニ與セント出ル路次ニテ行
逢理ヲ尺ハテ諫レハ与八郎同心シテ家
康公ノ陣ニ来リ御禮申ニ依テ御慇懃
ニ御會尺^尺有飯サレケル亦今川家強勢ノ
時与八郎諸事ノ取持ハ小原備後守ヲ

頼三親シムニ依テ今川没落ノ時備後馬
伏塚へ逃来ルニ与八郎日比ノ親ニツ爰
シ不入立刺打殺ス人倫ノ仕形ニハアラス
一同廿日家康公入山瀬ニ御出張去ル十日
ノ比ヨリ甲列秋山伯耆守晴近信列伊
奈ヨリ二股へ働キ愛宕山へ掛リ見付ニ
陣ヲ張國中ノ士ヲ招キ帳ニ書ノセ信
玄ノ威ヲフルヒケレハ乾ノ城主天野宮内右

衛門秋山ニ午合シテ遠列ヲ望処ニ家康
公ノ御味方トシテ奥平道汝菅沼伊豆
同新九郎田岸新三郎掛テ相戦秋山利
ヲ得テ引間へ出ル時ハ國中ノ侍我モノト
秋山ニ属セントス勾坂六郎五郎秋山ニ属
シテ勾坂ノ總領ナリト帳ニ付ル処ニ勾坂
十元衛門未テ勾坂ノ總領ノ嫡流某也
當國諸人存ジタニ更也ト云々秋山カ曰

六郎最前御味方ニ被參最早帳面ニ認
メ候処ヲ書替申支六郎五郎カ存ル処モ
候間先其通ニ被成候ヘ重テ信玄公ノ
御前ニテ御取成可申云々六郎五郎此支
ヲ聞テ秋山カ城門ニ待ラケテ十郎左衛門
ヲ切殺シ則掛川ヘ来リ家康公ニ屬シ奉
リ以来遠列ハ信玄ヨリ治メ給シ様子也下
云々是ニ依テ秋山カ御使ヲ被立兼テ信

玄ト申合タレ趣相遠也早々引取可然候
若合点ナクハ此カ被參候ヘ子細ヲ面談
ニ申達シ遠列ヲ信玄御望ナラズ相渡シ
可申候ト仰遣サレ秋山異儀ニ及ハ討殺
候ト宣ヒ本多平八郎榊原小平太酒井
左衛門三頭指續テ原川迄被遣ケル
秋山此由ヲ聞テ山梨子ニカ、リ駿府ヘ退
去ス秋山カ取置処ノ人質ヲ請取給ヒケレ

八弥々家康公ノ御威光一國ニ輝キ掛川
迄ノ通路不危本坂迄ノ警固ニ本多百
助ヲ遠易濱名ノ城代ニ指シカレ遠列御
味方ニ来ル者ニハ鑰掛ノ城代木公平并因幡
日比澤之後藤同弟藤八郎毛鹿野弥兵
衛久野三郎尤衛門其方松井一黨勾坂
一黨紙村一黨此者共人質ヲ百助請取三
列吉田ニ遣ス奥村大膳亮同山城守天野

宮内右衛門波是ハ信玄ニ内通ス然ルニ依テ
掛川御責ナサレ候時モ堀江喜比杯ハ
押ハノ勢ヲ向レケル

信長ハ御加勢被遣事

一永禄十一年秋信長天下ハ旗ヲ揚テ登リ
給フ節家康公モ加勢トシテ松平勘四郎
信一ニ諸家中ヨリ兵士ヲ出サセ指添テ
登セ給フ信長江列箕作ノ城ヲ取巻攻

給へ共城代武部源八城ヲ堅固ニ持ケル
責アクシテ此小城ニ掛リ日ヲウクシ詮ナ
キ更ト宣ヒ搦手ノ方ヨリ巻ホクシケル
ニ勘四郎信一城中ノ様子ヲ見切大手ノ
方ヨリ責入ハ城兵搦手ノ方ヨリ大形
落行則城ヲ乘取信長公へ注進申ケル
然ル間信長都へ入せ給へハ織田上野殿ノ
者ト三列ノ者ト乱妨取ニ出テ古烏帽子

一ツハ合上野殿ノ者ヲ三河ノ者カシ
タカニ打ケルニ依テ喧嘩ニナリ美濃、
尾張ノ衆カ一ツニ成テ勘四郎所へ押寄
ル三河衆モ弓鉄炮ヲ構へ寄来ル敵ヲ
待掛タリ信長此由ヲ聞給ヒ早々乗出
シ大音屯ニテ宣ヒケルハ家康ヨリ加勢ヲ
頼ミ其加勢ヲ討更哉アル寄カクル奴原
一々成敗セント怒リ給へハ散々ニ成テ引



退ク扱亦勘四郎ヲ召テ今度箕作ノ手
柄又此度喧嘩ノ裁判扱々比類ナキ働
也勘四郎ハ小男ナレ共膽ハ大キ也家康
卿ヨリ能キ加勢ノ大將ヲ越給ヒケル
ト御答ナリ

懸河落城之事

一家康公遠列ハ御發向有テ掛川ヲ攻ラ
ルキトテ八千余騎ノ著到ニテ永祿十二

年正月上旬世崎ヲ立テ吉田ニ著給フ
久野三郎左衛門ハ兼テ内通申御味方ニ
參ケル其外鴨江寺ノ寺家見付中泉池
田郡庄園等御味方ニ參ケル処ニ久野三郎
左衛門カ一族同佐渡日向同彈正同洪路
本間十市左衛門等評議シテ家康掛川ヲ
攻ラレハ一揆ヲ催シ跡ヨリ引包ニ討取ニ
於テハ氏真ヨリ遠列一國給ハラシト

義也侍ノ立身此取ニアリトテ三郎左衛
門ヲ諫メケル三郎左衛門カ曰義理ヲ守
テ其上ノ立身ハ侍ノ本意也去年氏真
ニ反テ家康ニ属シ今何ノ不足モナク家
康ニ謀叛シテ身ヲ立シ更本意ニアルス
ト云ク一族共赤面シテ又申ケルハ家康ヲ
討シトテ氏真ニ密通シ暫ク家康ニ属
スト云ナラハ忠義ノ侍ト諸人ノ存スヘキ

処也ト諫レハ三郎左衛門以外腹立シ人ハ
免モアレク用モアレ心ヲ以心ニ耻テレ候ヘ
ト云テ座敷ヲ立ヌレハ各諫メ兼テ
家ノ總領ナル程ニ取立テ大身ニセシト
スレハ器量ナキ故力ニ不及三郎左衛門
ヲ討テ舍弟ノ泔路ヲ取立ヘシト一変ス
然ル処ニ佐渡ト本馬是ヲ三郎左衛門ニ
告ヌレハ驚テ家康公ノ援兵ヲ請ケルニ

依テ則加勢ヲ遣サレ加勢ハ本丸久野ハ
二ノ丸ニ在テ一族ヲ呼ケレハ各其罪遁
レ難クシテ自害ス

一家康公吉田ノ城ニ入給ヒ老中ヲ集メ兩
日諸勢ヲ揃ヘ遠列ノ繪圖ヲ以委細ニ山
野海河沼田ノ難易城郭堀廻リ石垣本
道脇道迄一々ニ記サレ其上ニ陣所備配
ノ次第ヲ定テ凡、先陣ハ酒井左衛門本多

豊後石川日向松平弥左衛門上村出羽小栗
仁右衛門都合三千後勢ハ酒井雅樂助
松平玄蕃加藤播磨平岩七之助松平紀
伊戸田因幡牧野新次郎松平右近菅沼新
八郎都合三千余旗本ハ石川伯耆本多肥
後同平八郎天野三郎兵衛高力左衛門
此外近習ノ侍都合三千余内藤三左衛門
本多作左衛門渡部半藏柳原弥兵衛右

四人ハ掛川ノ大將卜定テ高力天野ヲ召
テ書付ヲ以制法被仰渡

禁制

- 一 甲乙人等乱妨狼藉之吏
- 一 山林竹木猥伐採之吏
- 一 押買并追立夫傳馬之吏

右之條々於遠背者連々可被所嚴科者也

永禄十二年正月日 天野三郎兵衛

高力与左衛門

本多作左衛門

- 一 家康公濱太公橋輪ノ法華寺ニ御陣
ヲ取給ヒ駿河ニ信玄居給フ故御使
トシ山^ラ置半左衛門植村与左衛門兩人
ヲ被遣ケル兼テ申定ル如ク遠列掛
川ハ其^共攻亡シ可申候遠列筋掛川卜
少モ御機遣ナク北条卜御取合ナク

レ候(トナリ)信玄ノ返答ニ尤遠列得
川殿治メ給ヘ兼約ノ通互ニ相遠有(カ
テスト云云)

一濱松ノ城ハ飯尾豊前朝比奈兵衛尉楯籠
テ守ケル去年駿府没落ノ時氏真ノ侍
大將三浦力^{邦智ノ}諛言ニ飽果氏真ヲ恨テ
廿一頭迄立離レケルガ掛川ヨリ三浦突
放サレ首ヲ刎ラレタルト聞エケレハ又立

飯ル者モ多カリケルサレニ依テ兵衛尉
モ来テ加勢スル処ニ城下ノ町人近村ノ
雜人二三千妻子ヲ引ツレ城中(走リ
入テ色々ニ申ケルハ三列ノ猛勢在在所
々ニ克満シ掛川濱松ノ町人其近村ノ者
ナラハ切捨ニセヨ隠シ置ニ於テハ一村撫
切ト觸廻ルノ故暫クモ身ヲ置ヘキ所
モ候ハス城中(入ラレ助ケ給ト歎キ

ケル兩人此由ヲ聞其躰ヲ見テ兎角掛川
ニテ運ヲ開キ給ハン支難シト思ヒ豊前守
立向テ先々シツリ候ヘ所詮此城ヲ明
テ掛川ニ可入ト思也急キ三河衆ニ注
進シ命ヲ助ルヘシト云テ所ヘ飯シ八月
丑ノ刻ニ城ヲ明テ退ケル町ノ者五六人
三河ノ先手ヘ走リ行此由申ケレハ酒井
雅樂助ニ方ヨリ騎馬ヲ指添彼町人ヲ本

陣ヘ参ラセケル大將此由聞シ召石川伯
耆天野三郎兵衛ヲ城中ヘ被遣掃除被
仰付井水ナト改ラレ未ノ刻ニ御本陣ヲ濱
本ノ城ヘ移サセ給フ九日久野三郎左衛門
自國ノ吏ナレハ天龍川ニ船橋ヲ掛ヨト
被仰付十日ニハ次第ヲ追テ押詰諸勢
ハ掛川ヲ一里程脇ニ見テ陣取テ扣ヘタリ
敵掛リナハ前陣後陣一ツニ成テ合戦

セヨト石川日向守ニ被仰付ケル

一十二日掛川ノ城へ押詰相谷ニ御本陣ヲ
張給フ掛川ノ城ニモ一騎當千ノ者モ
指集リ評定シケルハ兎角敵ヲ目ノアタリ
ニ寄セテハ悪カリナシ城ヲ遙ニ打出合
戦スヘシ其上敵ハ遠路押来ル勞兵味方
ハ自國ノ変ナレハ打テ出ハ引退キ新平
ヲ入替敵ニ息ヲツカスニシト約シテ五千

余騎大手ノ門ヨリ乗出ス寄手此由ヲ
見テ人馬ノ息ヲ休メ陣所ヲ不可出ト下
知シ弱々トシテ扣ヘケレハ敵ノ勢々氣ニ
乗テ間近ク押詰既ニ討散サントス寄
手ハ猶シツミリ引退ク風情ニモテナシ道
ノ左右ヨリ先陣後陣一ツニ成テヲメキ
サケンテ討テ出ル城兵引色ニ見ヘケレハ
勝時ヲ作テ追討ニ二百余騎討取此イ

キヲヒスカスナ掛レクト下知レ城際指
テ押詰ケル

一城ノ四面ヲ取圍ム次第素田村酒井左衛
門石川日向守植村出羽守松平左衛門
小栗仁右衛門曾我山三六酒井雅樂助松
平玄蕃加藤幡磨守平岩七之助松平
紀伊守東三河衆天王山三六高力与左衛門
小笠原与八郎久野三郎左衛門柵ノ廻リ番

二六渡部半藏服部半藏本多作左衛門
其外近習ノ衆番手ニ替リ役所ニ付
テ日夜ノ境モナク攻寄ル

一見付ノ古城ヲ毀テ新ニ溝壘ヲ營シ同
十六日家康公掛川ヲ攻テレシ爲ニ青田山
付城ヲ構ヘ十七日家康公ヲ率レテ天王
山ニ陣シ小笠原与八郎各高天神ノ軍
勢責之青久二藤山三六岡崎勢番手ニアリ

金丸山久野三郎左衛門一黨同十八日天王
山ヨリ日根野備中弟弥次右衛門同弥吉
魁シテ出合終日攻戦フ先年久野三郎
左衛門尉員岡寄勢二ノ年ニテ切返ト
一ノ共遂ニ敗ス此時林藤右衛門加藤孫
平次太_下平新助小林庄之助以下駿河方
ヲ討取駿兵梶原平三郎殿リス
一掛川袋井口ハ小倉内藏助藤田弾正固

メケルカ高天神衆九日ノ未明ヨリ度々
セリ合城兵利ヲ得テ見ケレハ家康公
大キニ怒リ給ヒ廿一日攻寄テキヒシキ戦
アリ廿三日天王中ノ北ニ旗ヲ互魁首ハ大湊
賀五郎左衛門大久保七郎右衛門松平周
防本多豊後大守ノ門ニ付ク城中ヨリ
駿河武功ノ勇士打出挑ミ戦フ美濃守
人伊藤武兵衛ニツ先ニ進ミ出ルヲ榊原

次右衛門討取近松丹波ヲ大久保次右衛門
討取日根野弥吉ヲ水野太一郎作討取
大谷七十郎ヲ水野宗兵衛討取内藤四郎
左衛門ト小坂新助討取レ敵ハ誰共知レズ
内藤四郎左衛門渡边半藏服部半藏先
登ニ進ム本陣ヨリ引取レト御下知ナレ
ハ西ノ方川田村ノ取手ニハ三河ノ兵ヲ番
勢ニ入笠所ノ砦ニハ作手長篠山家三

方ノ勢ヲ入置久野ニハ三郎左衛門曾我
ニハ小笠原トハ郎ヲ御入置二月中旬
ニ岡崎へ打入給フ

一 同三月初メ掛川ヨリ遠列ノ國人ヲカタラ
ヒ一揆ヲ催スノ由聞上ケレハ則見付ノ
府ニ出テ軍法ヲ定給フ処ニ城兵モ出
合セ国中ノ一揆ト牒レ合セ堀川ノ大次
左衛門カ搆ヲ破ラントス家康公此由ヲ

聞モアヘス駈付ラレ大久保甚十郎十七
歳平井甚五郎續テ進ケルカ鉄炮ニ中
テ死ス敵モ人爰ヲ專ト防キ戦フ笠原七郎
兵衛ヲ菅沼三五郎討菅沼帶刀ハ討松平
加兵衛朝比奈小三郎ヲ高橋傳七郎討新谷
小助ヲ本多三弥討伊藤左近ハ中山是非
之助討取三浦將監朝比奈備中笠原出
羽城際ニ於テ戦ヒ喰付出ル伊藤治部同

掃部朝比奈小隼人其外今川随一ノ勇士
百八十余人討ケレハ毘崎方ニモ六十余人
討死終ニ堀川ノ構ヲ破ル支ナラスニ
テ城中ヘ引入ル大久保甚十郎重手ヲ
蒙リ諸人ノ働ヲ見課セケルハ誠ニ勇
士ノ本意ナリ

一朝比奈備中守氏真ノ御前ニ罷出申ケル
一先ハ堅固ニ防戦仕ルトイ(トモ今ハ近

邊在々所々一字モ不殘敵領トナル上ハ
終ニハ兵糧尽果籠城難叶討出テ勝
利ヲ得ント思ハ敵ハ大軍ニテ後詰ヲ
ス(キ味方モナシ民政公モ今信玄ト取合
給ハ甲兵ヲ氣遣御出張モ有ハカラス某
明日討出無ニ無三家康ノ本陣ヲ切崩シ
勝利ヲ得ヘシ若勝利ナクハ城中(引込
防戰致シ討死仕ル其内ニ大將ハ一方打

破リ小田原ノ方へ御開キ可然ト諫レハ
置部次郎兵衛イヤク備中討死不可然
大將ノ御大事此時ニ不限一旦御降參
有テ北條民政ヲ御頼會替ノ耻ヲ雪キ
給(ト云々氏真為シ方ナク酒井雅樂助
石川日向守カ攻口ニ向テ朝比奈弥太郎ヲ以
和ヲ請ヒケル此旨家康公聞シ召レ三月
八日淺原ト云者ヲ以小倉内藏助方(仰

也遣サレケルハ我ハ義元恩顧フカシ其上
數通ノ誓紙アリ謔言ノ妨ニ依テ義絶
ス向後遠列ヲ賜ルニ於テハ踈意アルハカ
ラス此義御同心ナクハ信玄ニトテ給フ
ヘシ此方ハ賜ルニ於テハ小田原ト評シ
合セ信玄カ兵ヲ追拂ヒ氏真ヲ再駿
府ハ飯シ入申ヘシト云々小倉此申ヲ申
達スレハ氏真是非ナク領掌シ小倉家

康公ノ陣ニ未テ誓紙ヲ請取和睦シテ
掛川ハ家康公ニ渡ス此旨小倉ヲ以氏政
ノ三嶋ノ陣ニ告ラレ氏政ヨリ迎來リ五
月十六日辰ノ刻氏真父子掛塚ヨリ舟ニ
乘テ退去也家康公ヨリ松平若狹ヲ以亘
列戸倉迄送給フ扱掛川ノ城ハ石川日向
守ヲ以守ラシメ當分ハ酒井元衛門石川伯
耆守本多作元衛門モ可相守由ニテ被指

置御本陣ヲ見付（後シ諸勢ハ中泉ニ
充滿ス諸大將ヲ御前ニ召集メ軍功
ル諸士ヲ被召出各軍功々ルニ依テ早速
一國平均大慶不斜ト宣ヒ御盃ヲ下サレ
御酒宴ニ成テ御盃數度廻リ老若共
ニ喜悅不洩翌日ハ濱木ノ城（著座ナ
サレ老中并置崎近所ノ輩ノ外ニハ
不殘御暇下サレケル

一今川ノ属兵數艘ノ舟ニ乘テ掛塚ノ
漆ニ著ケル大須加五郎左衛門柳原小
平太鳥居彦右衛門ニ命シテ討セント
シ給ハ翌日退去ス

一去月家康公暫ノ間置崎（飯リ給フ処ニ
大沢左衛門尉カ家人共去年ヨリ牢人シ
テ有シカ尾藤主膳村山修理等堀川ノ
城ニ一揆ヲ催シ家康公ノ還路ヲ討シト

欲ス家康公是ヲ知不給僅十七八騎ヲ
通り給ハハ一揆是ヲ士卒ト思ヒ不構
跡ヨリ伯耆守打通ルヲ見テ後悔ス

一堀川ノ城御退治ノ事此要害ハ益満ル
舟ニテ出入アリ乾益ニハ唯一方口ニテ出
入不自由ナルト近藤鈴木菅沼申ニ依テ
三人ノ者ニ命シテ各押寄ル一揆共運
尽ケルニヤ潮大キニ乾テ出ヘキ様モナク

夕不残討レニケリ三列方ニモ平井甚五
郎大久保勘十郎小林平大夫等十六人
討死ス家康公此歸リニ山本帶刀ニ命
シテ見付ニ繩張シテ城ヲ取立ント宣
トモ凶地ナルニ依テ引間ノ城ヲ濱松ニ移
サレ御居城ト定ラレケル

一家康公宇豆山ノ城ヲ攻給フ城守小原
備前守捨城而退ク時硝火ヲ埋テ北去

ルニ依テ先午城中ニ込入時火ヲ發シ
ケレトモ少火早キ故替ル更ナシ

氏真駿府ニ歸リ又追出サル事

一家康公ハ兼約ヲ不遠氏真ヲ駿府へ
飯シ入ント思召氏政ト評シ合給ハ氏政
領掌シテ小田原ヨリ勢ヲ出シ薩埵山ニ
於テ信玄ト百日對陣シ日々足輕軍アリ
家康公ノ先午ハ駿府へ攻来リ山縣三郎

兵衛力留主居ヲ追散ス信玄兩敵ヲ引請
難叶山越ニ甲列へ引入ヌレハ氏真ハ毎ニ
駿城ニ還入ス燒失シテ家ナキニ依テ阿部
大藏本川日向久野彈正小倉内藏助ニ命
シテ城郭ヲ造營ス其内土倉ニ逗留
一信玄ハ駿河ヲ取返サレ遺恨ニ思ヒ小田原
一兵ヲ發シ悉ク勝利ヲ得ス三増山ニ
待請小田原ヨリ暮来ル軍兵ヲ討散シ

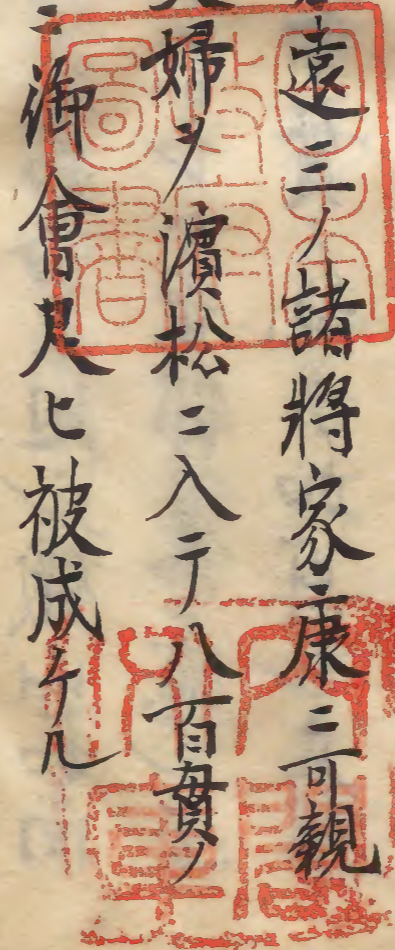
八王寺ニ引入ル

一 小田原ノ家老評シテ曰氏真ノ加勢ト号
シ軍勢大半駿府ニアル故信玄ニ小田原
迄寄テル、更無念サヨト云テ駿列ノ援
兵ヲ小田原ヘ引取ケル是ニ依テ信玄頓
テ駿河ヘ働キ蒲原ノ北条新三郎氏時
ヲ攻殺シ其ヨリ府中ノ城ヘ取掛ル処ニ是
部次市右衛門同治部右衛門堅ク守テ不

屈然ルニ依テ信玄知略ヲ廻シ鐵山和尙
ヲ以岡部ヲ賺シケレハ是部是ニ應シテ
信玄ニ降ル則千貫ノ地ヲ加恩シ其ヨ
リ小原肥前守カ守ル花沢ノ城ヲ取圍ニ
終ニ攻落シケレハ氏真力屈シ駿府抱
難ク小田原ヘ亦退去也

一 氏真ヲ小田原ヨリ品川ニ居所ヲ構ヘ置給
フ其後甲列ト小田原和睦也氏真ノ内

室ハ氏政ノ妹ナリニ依テ是ヲ怒リ小田原
ノ家老ヲ呼寄悪口シテ品川ヨリ舟ニ
乘遠列ニ至リ家康公ヲ頼ニレケル家
康公ノ曰尤數度ノ契約アレハ少モ踈意
ナシト念比ニ領掌シ給フ其上氏真公爰
ニアラハ今川家遠ニテ諸將家康ニ可親
ト思召氏真夫婦ノ濱松ニ入テ八百貫ノ
地ヲ与ヘ慇懃ニ御會見ヒ被成ケル



天正六年八月廿一日

奉命往見

東邊別

處公

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

